HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「新人文主義」の深化を祈念して
著者	濱，忠雄；HAMA，Tadao
引用	北海学園大学人文論集(56)：7-15
発行日	2014-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

濱　忠雄教授

「新人文主義」の深化を祈念して

濱　　忠　雄

定年退職にあたり研究の足跡を整理していて気付いたことがあります。私の研究は，北海学園大学着任後に，少なくとも数の上では「生産性」が上昇したことです。大学院生時代に初めて論文（研究ノート）を書いた 1971 年から起算して 42 年間のうち，学園時代は約 4 分の 1 の 11 年ですが，単著書が 3 編中 2 編，学術論文は 33 編中 11 編で 3 分の 1，その他（研究ノート，書評，学会発表，講演など）を含む総計 105 編中では 36％の 38 編となります。

前任校である北海道教育大学岩見沢校での 28 年間に積み重ねてきた基礎的･準備的作業が土台になったこともさることながら，決定的に重要だったのは，北海学園大学人文学部が掲げる理念である「新人文主義」に深く共鳴したことです。

近代ヨーロッパに起源を持つ人文主義を継承しつつ，同時に，その人文主義が堕ちこんだ隘路から脱して，他者や自然と共生しながら，人間のあるべき生き方を追求しようとする「新人文主義」を学園時代の研究の指針としてきました。また，エドワード・W・サイードの「遺著」と言うべき *Humanism and Democratic Criticism*（New York, 2004. 村山敏勝・三宅敦子訳『人文学と批評の使命 ── デモクラシーのために』岩波書店，2006 年。2013 年には岩波現代文庫版）からも重要な示唆を得ました。

私の研究課題は，「知られざる国」ハイチの歴史の細部にまで分け入り，カリブの小国ハイチというローカルな場から出発して人文主義や啓蒙思想，「人権宣言」などのヨーロッパ的な〈知〉の意味を問い直し，また，「フランスとハイチ」といった一対一の対面関係にとどまらず，「大西洋史」の概念による世界的横断による分析や，脱植民地化や普遍的自由，ポストコ

ロニアルといった長期的なパースペクティヴでの検討などをとおして，より等身大に近い近代世界史を構想することにありますが，その研究が「新人文主義」に繋がったからです。

言うまでもなく，人文（科）学（humanities）は，人間の本性と人為の所産としての文化を研究対象とするもので，それは，人間と人間との関係を研究対象とする社会科学や，人間を取り巻く自然や環境そのものを研究対象とする自然科学とは区別される，学問の一分野です。

それに対して，「新人文主義 New Humanism」は，そのような区分を超えた，人文（科）学，社会科学，自然科学のすべてにまたがる視座，スタンスです。なぜなら，私たちが人間と人間との関係や人間を取り巻く自然そのものを研究するのは，「人間のあるべき生き方」つまり「人間が人間としてよりよく生きる」こととの関わりで問題になるからです。しかし，そもそも「人間が人間としてよりよく生きる」とはどういうことなのでしょうか。

「人間が人間としてよりよく生きる」そして「人間として，普通に，ごく当たり前に生きる」ことの大切さと難しさを痛切に考えさせられたのが2011年3月11日の大震災と核災害でした。「人間として，普通に，ごく当たり前に生きる」とはどういうことか，これは退職後の私の宿題です。

末筆ながら，学びの場を共にした学生・大学院生の皆さん，同僚教員の皆さん，研究と教育を支えて下さったすべての学園職員の皆さんに心からお礼を申し上げます。そして，人文学部の更なる発展を，とりわけ「新人文主義」の理念が日常の研究と学びの場でいっそう鍛えられ深化されんことを，祈念しております。

略　　歴

濱（はま）　忠雄（ただお）　1943 年 5 月 27 日生

学　　歴

1967 年 3 月　北海道大学文学部史学科卒業
1969 年 3 月　北海道大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士）
1975 年 3 月　北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学

職　　歴

1975 年 4 月　北海道教育大学教育学部助手岩見沢分校
1977 年 4 月　同　助教授
1988 年 4 月　同　教授
2003 年 4 月　北海学園大学人文学部・大学院文学研究科教授

主な研究業績

＊研究はすべて「浜忠雄」名で発表している

［Ⅰ．著書］

［単著書］

1．『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学図書刊行会，1998 年 2 月
2．『カリブからの問い ── ハイチ革命と近代世界〔世界歴史選書･国家と地域を問いなおす〕』岩波書店，2003 年 10 月
3．『ハイチの栄光と苦難 ── 世界初の黒人共和国の行方〔世界史の扉･地域 6〕』刀水書房，2007 年 12 月

［共著書］

1．『南北アメリカの 500 年　第 2 巻　近代化の分かれ道』（歴史学研究会

編）青木書店，1993 年 1 月 ──「ハイチ革命」を分担

2．『講座世界史　第 2 巻　近代世界への道』（歴史学研究会編）東京大学出版会，1995 年 6 月 ──「フランス革命・ナポレオン戦争とラテンアメリカ」を分担

3．『ナポレオン　皇帝編　フランス革命と英雄伝説〔歴史群像 47〕』学習研究社，1996 年 10 月 ──「大陸封鎖は成功しえたか」を分担

4．『「女」と「男」── ジェンダーで説きあかす現代社会』（北海道教育大学公開講座委員会編）北海道大学図書刊行会，1997 年 5 月 ──「ヨーロッパの歴史にみるジェンダー」を分担

5．『岩波講座世界歴史　第 17 巻　環大西洋革命』岩波書店，1997 年 10 月 ──「ハイチ革命とラテンアメリカ諸国の独立」を分担

6．『フランス革命とナポレオン』（専修大学人文科学研究所編）未来社，1998 年 11 月 ──「サン=ドマング〔ハイチ〕とナポレオン」を分担

7．『ラテンアメリカからの問いかけ ── ラス・カサス，植民地支配からグローバリゼーションまで』（西川長夫・原毅彦編）人文書院，2000 年 11 月 ──「ハイチからの問いかけ」を分担

8．『文化アイデンティティの行方』（恒川邦夫他編）彩流社，2004 年 2 月 ──「フランス革命とハイチ革命」を分担

9．『「植民地責任」論 ── 脱植民地化の比較史』（永原陽子編）青木書店，2009 年 3 月 ──「ハイチによる『返還と補償』の要求」を分担

［共訳書］

1．ロナルド・シーガル『ブラック・ディアスポラ ── 世界の黒人がつくる歴史・社会・文化』（富田虎男監訳）明石書店，1999 年 6 月 ──「一国の革命」「ハイチの大量流血」「アイデンティティのディレンマ ── マルティニクとグアドループ」「ハイチの空間」「無垢の眼」を分担

［II　学術論文］

1．「フランス旧植民地体制の諸問題（Ⅰ）」『論集』（札幌短期大学・札幌商科大学）13 号，1974 年 12 月

2．「フランス革命の植民地問題 ── 黒人奴隷制の廃止をめぐる論争」『歴

史学研究』（歴史学研究会）419 号，1975 年 4 月

3．「『原則よりも植民地が滅んだほうがよい』というアポストロフについて」『史流』（北海道教育大学史学会）17 号，1976 年 3 月

4．「フランス旧植民地体制の諸問題（II）」『北海道教育大学紀要』27 巻 2 号，1977 年 3 月

5．「世界史認識と植民地 ── レナール『両インド史』の検討をとおして（Ⅰ）」『北海道教育大学紀要』31 巻 1 号，1980 年 9 月

6．「世界史認識と植民地 ── レナール『両インド史』の検討をとおして（II）」『北海道教育大学紀要』31 巻 2 号，1981 年 3 月

7．「世界史認識と植民地 ── レナール『両インド史』の検討をとおして（III）」『北海道教育大学紀要』34 巻 1 号，1983 年 9 月

8．「ハイチ革命研究序説（Ⅰ）」『北海道教育大学紀要』35 巻 1 号，1984 年 9 月

9．「ハイチ革命研究序説（II）」『北海道教育大学紀要』36 巻 1 号，1985 年 9 月

10．「ハイチ革命研究序説（III）」『北海道教育大学紀要』36 巻 2 号，1986 年 3 月

11．「『子供の歴史』をめぐる諸問題（Ⅰ）」『北海道教育大学紀要』37 巻 1 号，1986 年 10 月

12．「『子供の歴史』をめぐる諸問題（II）」『北海道教育大学紀要』37 巻 2 号，1987 年 3 月

13．「『子供の歴史』をめぐる諸問題（III）」『北海道教育大学紀要』38 巻 1 号，1987 年 10 月

14．「植民地からみたフランス革命」『歴史地理教育』（歴史教育者協議会）444 号，1989 年 7 月 ──『歴史地理教育実践選集　第 31 巻　世界の歴史と現代 ── ヨーロッパ』新興出版社，1992 年 9 月に再録

15．「ハイチからみたフランス革命」『歴史評論』（歴史科学協議会）467 号，1989 年 12 月

16．「トゥサン・ルヴェルチュール像の一側面 ──『フランス領植民地サン=

ドマング憲法』を手がかりに」『史流』31 号，1991 年 3 月

17.「ハイチの独立と植民地支配の『遺産』── ハイチ革命開始 200 年によせて」『歴史学研究』623 号，1991 年 9 月

18.「フランス革命における黒人奴隷制廃止論争・再考（Ⅰ）」『史流』32 号，1992 年 3 月

19.「フランス革命と植民地主義」『北海道教育大学紀要』43 巻 1 号，1992 年 7 月

20.「フランス革命における黒人奴隷制廃止論争・再考（Ⅱ）」『史流』33 号，1993 年 9 月

21.「オランプ・ド・グージュと黒人奴隷制 ── 戯曲『黒人の奴隷制または幸いなる難破』に見る」『史流』35 号，1995 年 6 月

22.「ハイチの独立と国民国家形成」『立命館言語文化研究』（立命館大学国際言語文化研究所）12 巻 1 号，2000 年 6 月

23.「ハイチによる「返還と補償」要求をめぐって ──『植民地責任』論のための準備的考察」『年報　新人文学』（北海学園大学大学院文学研究科） 1 号，2005 年 3 月

24.「ハイチから見るフランス革命」『専修大学大学院社会知性開発研究センター／歴史学研究センター年報』 3 号，2006 年 3 月

25.「ブラック・ディアスポラとハイチ・アート」『学園論集』（北海学園大学）132 号，2007 年 6 月

26.「ハイチ革命と『西半球秩序』」『人文論集』（北海学園大学人文学部）42 号，2009 年 3 月

27.「ハイチ，貧困化の歴史的要因と解放・抵抗の歴史」『飛礫』別冊 1 号，つぶて書房，2010 年 8 月

28.「ハイチ革命再考」『年報　新人文学』 7 号，2010 年 12 月

29.「ハイチ史における植民地責任 ──『アメリカによる軍事占領』をとおして」『学園論集』147 号，2011 年 3 月

30.「ハイチから『新人文主義』を考える」『新人文主義の位相 ── 基礎的課題』（平成 22・23 年度北海学園学術研究助成共同研究報告書）2012

年 3 月

31.「リンカーンの黒人植民構想とハイチ承認」『人文論集』53 号，2012 年 11 月

32.「ジロデ=トリオゾンの作品における身体表象 ── レイシズム，ネイション，ジェンダー」『学園論集』155 号，2013 年 3 月

33.「『両インド史』における歴史認識の諸問題」『学園論集』157 号，2013 年 9 月

［Ⅲ　その他］（研究ノート，学会発表，講演，エッセイなどは略す）

1．「書評　歴史科学協議会編『民族の問題』〔歴史科学体系 15〕」（西山克典と共著）『歴史評論』342 号，1978 年 5 月

2．「書評　C・L・R・ジェームズ著『ブラック・ジャコバン ── トゥサン=ルヴェルチュールとハイチ革命』（青木芳夫監訳）」『週間読書人』1991 年 5 月 20 日付

3．「書評　田中治男・木村雅昭・鈴木董編『フランス革命と周辺世界』」『文化会議』282 号，1992 年 12 月

4．「書評　服部春彦著『フランス近代貿易の生成と展開』」『歴史学研究』644 号，1993 年 4 月

5．「書評　I・ウォーラーステイン著『近代世界システム 1730-1840 s　大西洋革命の時代』（川北稔訳）」『歴史評論』577 号，1998 年 5 月

6．「書評　藤井真理著『フランス・インド会社と黒人奴隷貿易』」『社会経済史学』（社会経済史学会）67 巻 4 号，2001 年 11 月

7．「書評　平野千果子著『フランス植民地主義の歴史 ── 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』」『西洋史学』（日本西洋史学会）208 号，2003 年 3 月

8．「時評　ハイチの大地震と『植民地責任』」『歴史学研究』868 号，2010 年 7 月

送る言葉

安　酸　敏　眞

濱忠雄先生がこの3月で本学をご退職になります。英米文化学科の教員を代表して，ひとこと感謝と餞の言葉を述べたいと思います。

濱先生とはこの10年間,同じ学科の同僚として親しくさせていただきました。先生はわたしよりも1年前に本学に着任しておられましたので，通算11年間本学に奉職されたことになります。専門分野が違いますので久しく存じ上げなかったのですが,わたしの本学就任が本決まりになったとき,前任校のある同僚が散々恨み節を述べたあと（わたしの移籍は同僚たちにとって相当ショックだったのです),移籍先の学科にはどういうスタッフがいるのかと尋ねました。そこでわたしが，某氏を通してもたらされた情報に基づいて，なんでもハマ先生という方がこれからの英米の軸になるらしいと答えると，その同僚は「あのハイチの濱先生ですか？」と驚きの表情を見せました。彼の専門はフランス史ですので,濱先生のご高名ぶりを知っていても可笑しくないのですが，彼が咄嗟に口にした，尊敬を含む「あのハイチの濱先生」という印象的な言葉は,今でもわたしの記憶の奥底にしっかり残っています。

わたしが着任した当初，濱先生は教務委員か学科委員をされており，すでに学部・学科そして大学院の中軸を担っておられました。先生の学問内容を詳しく知るには少し時間がかかりましたが，その誠実かつ冷静沈着なお人柄には最初からに強く惹かれました。あるとき先生が，自分は「テイコクシュギ」を信条としていると言われたので，わたしはすっかり当惑しました。出来の悪いわたしの頭のなかの字引には,「帝国主義」しかなく「定刻主義」が存在しなかったからです。ともあれ，濱先生はまさしく定刻主義者であり，いかなる会議であれ，あるいは原稿や提出書類の締め切りで

あれ，決められた日時に遅れるということは一度もありませんでした。出勤・帰宅もほぼ毎日定時で，ごく稀にそうでないことがあると，何か異変があったのではないかと心配したほどです。カントも顔負けのこの律義さは，先生の性格をよく表していると思います。

もうひとつ忘れがたいことは，わたしが学部長時代に法人や学長の反対を押し切って，あえて「ヨーロッパ研修」を実施した際，ただ一人先生は多額の餞別をくださいました。お陰様でパリのレストランで学生たちに昼食を奢ることができました。

個人的な回想ばかり先に述べましたが，「あのハイチの濱先生」と言わしめた先生の学問研究の足跡とその業績について，つぎに簡単に記させていただきます。

濱忠雄先生は，北海道教育大学教育学部助手・助教授・教授を経て，2003年4月に北海学園大学人文学部ならびに大学院文学研究科教授として着任されました。2008年4月には大学院文学研究科長に就任され，2012年3月まで4年間にわたってその重責を果たされました。先生のご専門は西洋史学ですが，北海道大学大学院在籍中から「フランス旧植民地体制の諸問題」に取り組まれ，爾来40年間にわたってフランス革命とハイチ革命を主たる研究テーマとしてこられました。40星霜にわたる研究業績は，3冊の単著『ハイチ革命とフランス革命』（北海道大学図書刊行会，1998年），『カリブからの問い ── ハイチ革命と近代世界 ──』（岩波書店，2003年），および『ハイチの栄光と苦難 ── 世界初の黒人共和国の行方 ──』（刀水書房，2007年）に結晶していますが，それ以外にも主にハイチを主題とした，共著書，共訳書，学術論文，書評，評論，エッセイ，学会発表，学術講演などは，枚挙にいとまがありません。このように，名実ともにハイチ研究の第一人者である濱先生と，同僚として接することが許されたことは，わたしにとって実に光栄なことでした。

つねに良き兄のような立場で導いてくださった先生とお別れするのは寂しいですが，これからもわたしたちの学部・学科の発展を見守ってくださるよう，心からお願い申し上げます。